

宮崎駿監督作品

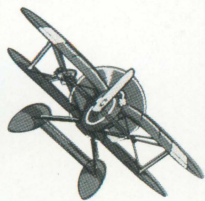
紅の豚

カッコイイとは、こういうことさ。

唄・加藤登紀子「さくらんぼの実る頃」

製作/徳間康快・利光松男・佐々木芳雄 ■ 企画/山下辰巳・尾形英夫 ■ 原作/宮崎駿(月刊「モラルグラフィックス」連載) ■ 唄/加藤登紀子「さくらんぼの実る頃」(時には昔の話を) (シングル/ソニーレコード サントラ/徳間ジャパンコミュニケーションズ)

音楽/久石譲 ■ 声の出演/森山周一郎・加藤登紀子 ■ プロデューサー/鈴木敏夫 ■ 徳間書店・日本航空・日本テレビ放送網・スタジオジブリ提携作品 ■ 配給/東宝



「となりのトトロ」「魔女の宅急便」に続く 宮崎 駿の最新話題作!

なぜ男はブタになったのか

時は第一次世界大戦後の1920年代の末、舞台は欧州のアドリア海。かつて空軍のエース・パイロットだった男が、迫り来る戦争を前に、再び「国家の英雄」になるのをきらって、自ら魔法をかけてブタになってしまいます。そして、紅い飛行艇を操って大空を自由に飛びまわり、空から客船を襲撃し悪事を働く「空賊」、退治の賞金稼ぎをしています。そんな彼を、人は「紅の豚」=ポルコ・ロッソと呼んでいました。

そんなポルコをいつもやさしく見つめる美しい女性ジーナ。今も密かに思い続けているふたりなのに、なぜか距離をおいています。そして、ポルコの前に現れるもうひとりの女性17歳の少女フィオ。ポルコの乗る飛行艇の修理に大活躍する彼女は、ひょんなことからポルコと行動をともにすることに…そのフィオにちょっかいを出そうとするのが、アメリカからやって来たライバルの飛行機乗りカーチスという男。

ポルコとふたりの女性との関係を縦軸に、空賊たちとの戦いを横軸に、物語はドキドキする展開になっていきます。ポルコとカーチス、宿命のライバルの決着は?そして、ポルコとふたりの女性の恋ともいえぬ三角関係の行方は?そして、ブタになったポルコの魔法はとけるのか…

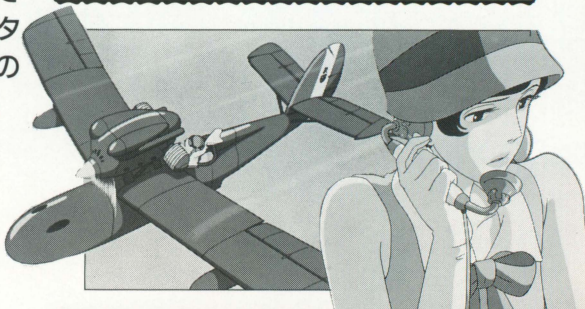
ご存じのように、宮崎駿といえば、「風の谷のナウシカ」以来、「天空の城ラピュタ」「となりのトトロ」「魔女の宅急便」と新作を出すたびに、その意外性と新鮮さと楽しさが多くの人の心をとらえてきました。「紅の豚」は、その宮崎駿が「トトロ」以来4年ぶりに、自らの原作をもとに脚本・監督のすべてを担当した待望のオリジナル映画です。

今回は、なんと、自分で自分に魔法をかけてブタになったヒコーキ乗りの愛と冒険の物語です。

気分爽快! 胸ワクワクの 航空大活劇ロマン!

全編にわたって大空を飛翔する爽快感にあふれたこの作品は、ギャグあり、ロマンあり、ファンタジーありと、宮崎作品ならではのサービスにあふれています。ラブストーリーで女性を酔わせ、続々登場するヒコーキと大空中戦のスリルで男たちをしびれさせるという、若者男女すべての人々をワクワクさせる、実にぜいたくな内容になっています。

この映画は今までの「宮崎アニメ」にも類型のない、しかし、宮崎駿ならではの「新しい映画」への挑戦となる野心作なのです。「古きよき時代」にたとえるなら、宮崎駿版「カサブランカ」の香りが漂う作品ともいえるでしょう。大空を舞台にした、気分爽快、明るく楽しいこの航空大活劇ロマンにご期待下さい。



演出覚書「紅の豚」メモ・宮崎駿

国際便の疲れきったビジネスマン達の、酸欠で一段と鈍くなった頭でも楽しめる作品、それが「紅の豚」である。少年少女達や、おばさま達にも楽しめる作品でなければならぬが、まずもって、この作品が「疲れて脳細胞が豆腐になった中年男のための、マンガ映画」であることを忘れてはならない。

陽気だが、ランチキさわぎではなく、ダイナミックだが、破壊的ではない。愛はたっぷりあるが、肉慾は余計だ。誇りと自由に満ち、小技のしかけを廃してストーリーは単純に、登場人物達の動機も明快そのものである。男達はみんな陽気で快活だし、女達は魅力にあふれ、人生を楽しんでいる。そして、世界も又、かぎりなく明るく美しい。そういう映画を作ろうというのである。

●スタッフ

製作 徳間康快
 // 利光松男
 // 佐々木芳雄
 企画 山下辰巳
 // 尾形英夫
 原作 宮崎 駿
 (月刊「モラルグラフィックス」連載)
 プロデューサー 鈴木敏夫
 脚本・監督 宮崎 駿
 声の出演 森山周一郎
 // 加藤登紀子
 主題歌 加藤登紀子
 (シングル/ソニーレコード
 サウンド/徳間ジャパンコミュニケーションズ)
 音楽監督 久石 譲
 制作 スタジオジブリ
 配給 東宝



7月18日(土)全国東宝<夏休み>ロードショー!
 よ洋画系